

# 常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永く、そして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかむかしの、貴重な文化財が今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、立体交差事業に伴う常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

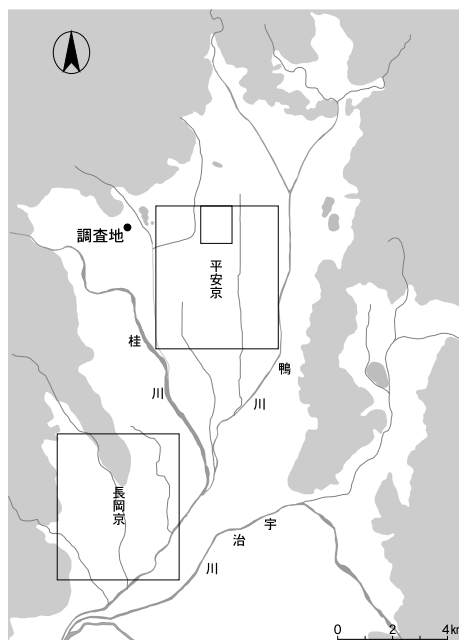
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町他 地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2011年11月28日～2012年1月26日
- 5 調査面積 約280㎡
- 6 調査担当者 近藤章子・菅田 薫
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

(調査地点図)





# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	8
(1) 調査の概要	8
(2) 1 区の遺構	8
(3) 2 区の遺構	9
(4) 3 区の遺構	17
4. 遺 物	22
(1) 遺物の概要	22
(2) 2 区の遺物	22
(3) 3 区の遺物	25
5. ま と め	27

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1	2 区南部第 1 面全景（北から）
		2	2 区北東部第 1 面全景（北から）
		3	2 区北西部第 1 面全景（北東から）
図版 2	遺構	1	2 区南部第 2 面全景（北から）
		2	2 区北東部第 2 面全景（北から）
		3	2 区北西部第 2 面全景（北から）
図版 3	遺構	1	2 区集石 41 セクション（北西から）
		2	2 区土坑 19 土器出土状況（北から）
		3	2 区耳環出土状況（東から）
		4	2 区溝 149 須恵器出土状況（北東から）
図版 4	遺構	1	3 区北半部全景（北から）

	2	3区南半部全景（北から）
図版5	遺構	1 3区門1（西から）
	2	3区門2脇門（北から）
	3	3区門2（北から）
図版6	遺物	出土遺物1
図版7	遺物	出土遺物2
図版8	遺物	出土遺物3

## 挿 図 目 次

図1	1区調査前全景（北から）	1
図2	2区調査前全景（南西から）	1
図3	3区調査前全景（南から）	1
図4	作業風景（北から）	1
図5	調査区配置図（1：500）	2
図6	調査地と周辺の遺跡（1：5,000）	4
図7	1区（北東から）	8
図8	1区平面図（1：100）、西壁柱状図（1：20）	9
図9	2区第1面平面図（1：100）	10
図10	2区第2面平面図（1：100）	11
図11	2区東壁断面図（1：100）	12
図12	2区北壁断面図（1：100）	13
図13	2区土坑19実測図（1：20）	13
図14	2区集石41および下面遺構実測図（1：40）	14
図15	2区X=-108,924ラインセクション断面図（1：40）	15
図16	2区溝149実測図（1：40）	15
図17	2区落込50・溝18セクション断面図（1：40）	16
図18	3区平面図（1：150）	17
図19	3区西壁断面図（1：100）	18
図20	3区門1実測図（1：50）	19
図21	3区門2実測図（1：50）	20
図22	3区溝14実測図（1：40）	21
図23	2区出土遺物拓影・実測図（1：4、4のみ1：6）	24

図 24	2区出土その他の遺物実測図（1：4、1：2）	25
図 25	3区出土遺物拓影・実測図（1：4）	25
図 26	広隆寺境内内外区別実測図および周辺調査位置図（1：5,000）	27
図 27	遺構分布図（1：500）	28

## 表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	22



# 常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

## 1. 調査経過

本調査は、市道梅津太秦線（通称城北街道）限度額立体交差事業に伴う発掘調査である。調査は京都市建設局事業推進室より委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導の下、実施した。調査地は、古墳時代後期から飛鳥時代を中心とする集落跡である常盤仲之町遺跡の東端に、古墳時代後期の群集墳である常盤東ノ町古墳群の南端に該当する。また、調査区の一部は飛鳥時代に創建された広隆寺旧境内に隣接する。

本事業に伴う調査は2008年度より行っており、今回の調査が6次調査となる。今回はJR嵯峨野線の北側で、3箇所において調査を実施した。城北街道東側の南より1区・2区、西側を3区として調査区を設定した。調査面積は1区が約25㎡、2区が約118㎡、3区が約134㎡で、総計約280㎡であった。

まず民家の出入り口前となる1区から着手した。当初予定していた調査区の範囲では住民の出入りが困難となることから、セットバックした。1区は調査区内の西半部の地表面がタイル張りされており、重機掘削の際に飛散する恐れがあるため、通常より細かくカッター入れを行った。



図1 1区調査前全景（北から）



図2 2区調査前全景（南西から）



図3 3区調査前全景（南から）



図4 作業風景（北から）

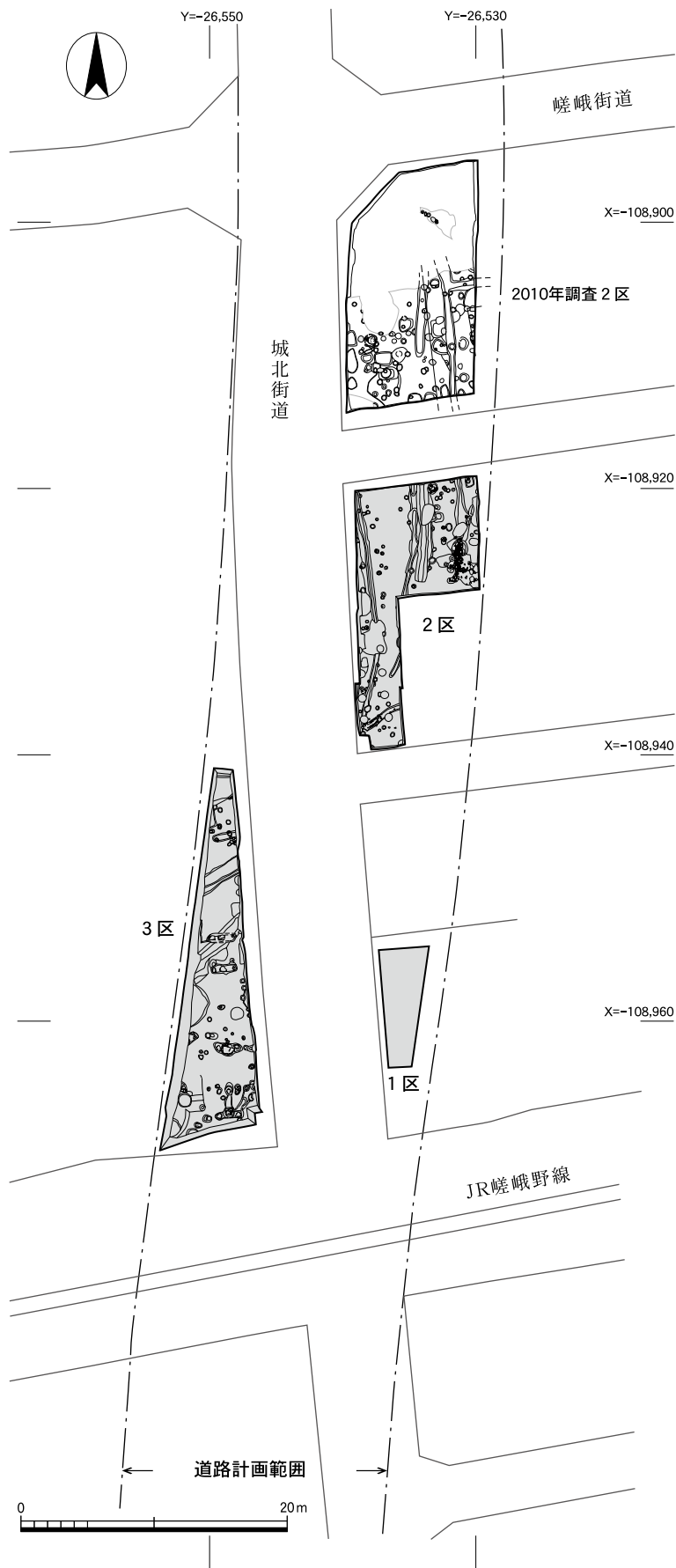


図5 調査区配置図 (1:500)

その後、重機による掘削を行ったが、当初予想されていた以上に旧建物や敷設管などによる攪乱が著しく、またコンクリート基礎が地中深くまで残存しており、基礎の撤去は調査区以外の範囲にまで影響を及ぼす恐れがあるため、文化財保護課の指導により途中で断念した。そのため西壁断面を観察するに留まった。その後、埋め戻しを行い復旧した。

2区は、現在稼働中である駐車場の出入り口と、調査中の残土の仮置場を確保するために、3分割して南から調査を行った。各々、調査終了後に埋め戻し、反転しながら調査を行った。2区の南端は旧建物の円柱基礎により、一部攪乱されていたが、概ね遺構・遺物は良好に遺存していた。中世の整地層を除去して第1面、基盤層(地山層)の上面で第2面として調査を行った。調査終了後は駐車場の出入り口に碎石を入れ、復旧した。

3区は、旧テニスコートである。ほぼ全面が厚さ5cm程のアスファルト敷きで、南端は東映太秦映画村の駐車場出入り口に隣接して一段下がり、アスファルト舗装されていた。重機掘削開始前に調査区範囲のアスファルトカッター切断作業を行った。また、城北街道沿いには高

さ約4mのネットフェンスが張られていたが、これらを半分の高さまで切断し、除去した。この調査区は盛土が厚いため、機械掘削による残土は場外搬出し、南北に2分割して北から調査を行い、調査終了後埋め戻し、南へ反転した。調査区は上部はほとんど削平されており、地山層で遺構を検出した。調査終了後は、埋め戻しを行い、東映太秦映画村の駐車場出入り口に隣接する一部のみ、アスファルト舗装した。

すべての調査区で、アスファルトを含めコンクリートガラなどは産業廃棄物として処分した。

遺構などの記録は、平面図を中心に適宜、断面図・個別図を併用した図面を作成し、遺構面ごとに全景と個別遺構の写真撮影などを行った。

調査の進展に伴い、各調査区で適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、検証委員である京都産業大学の鈴木久男教授、立命館大学の高正龍教授の視察を2011年12月26日に受けた。

## 2. 位置と環境

### (1) 遺跡の位置と環境

調査地は京都市の西部、桂川の左岸に位置し、北部一帯には山地が広がる。丘陵裾から南西へ流れる桂川へ向けて、北東が高く、南西へ低くなる緩傾斜地となる。調査地の北東には国の名勝に指定されている双ヶ岡があり、その西の裾を北西の鳴滝・宇多野より南東方向へ御室川が流れる。調査地が含まれる常盤仲之町遺跡および常盤東ノ町古墳群は、古御室川が形成した扇状地上に立地する。

北部には山間部に旧石器や縄文時代の遺跡があり、古墳時代には大規模な群集墳が丘陵裾や丘陵腹、台地に築造される。西接には飛鳥時代に渡来系氏族である秦氏が造営したと伝えられる広隆寺がある。平安時代には広隆寺を中心にして集落が発展し、また、嵯峨方面に天皇の離宮や別業、寺などが造営されると、平安京とそれらの中間に位置するため、平安京と嵯峨地域を結ぶ古道であった嵯峨街道（現下立売通）が賑わいを見せたと思われる。また、成立時期は不明であるが、調査地の中心を城北街道が南北方向に延びる。

調査地周辺は江戸時代には太秦門前村にあたり、京都近郊の農村として定着し、現代まで至る。明治7年に太秦4村が合併して太秦村となり、広隆寺の境内地は縮小し、明治30年には旧境内地を横断して京都鉄道が開通し、やがて山陰本線として引き継がれる。またその一部には映画会社の撮影所が造られる。戦後には住宅地としての開発が進み、高度経済成長以降、住宅やマンションが密集する市街地となる。

### (2) 周辺の調査（図6、表1）

調査地は、常盤仲之町遺跡の東端部に位置している。特に本調査3区は、広隆寺（広隆寺旧境内）の北東限に隣接している。また、秦氏との関連が考えられる木嶋坐天照御魂神社（蚕の社）が南

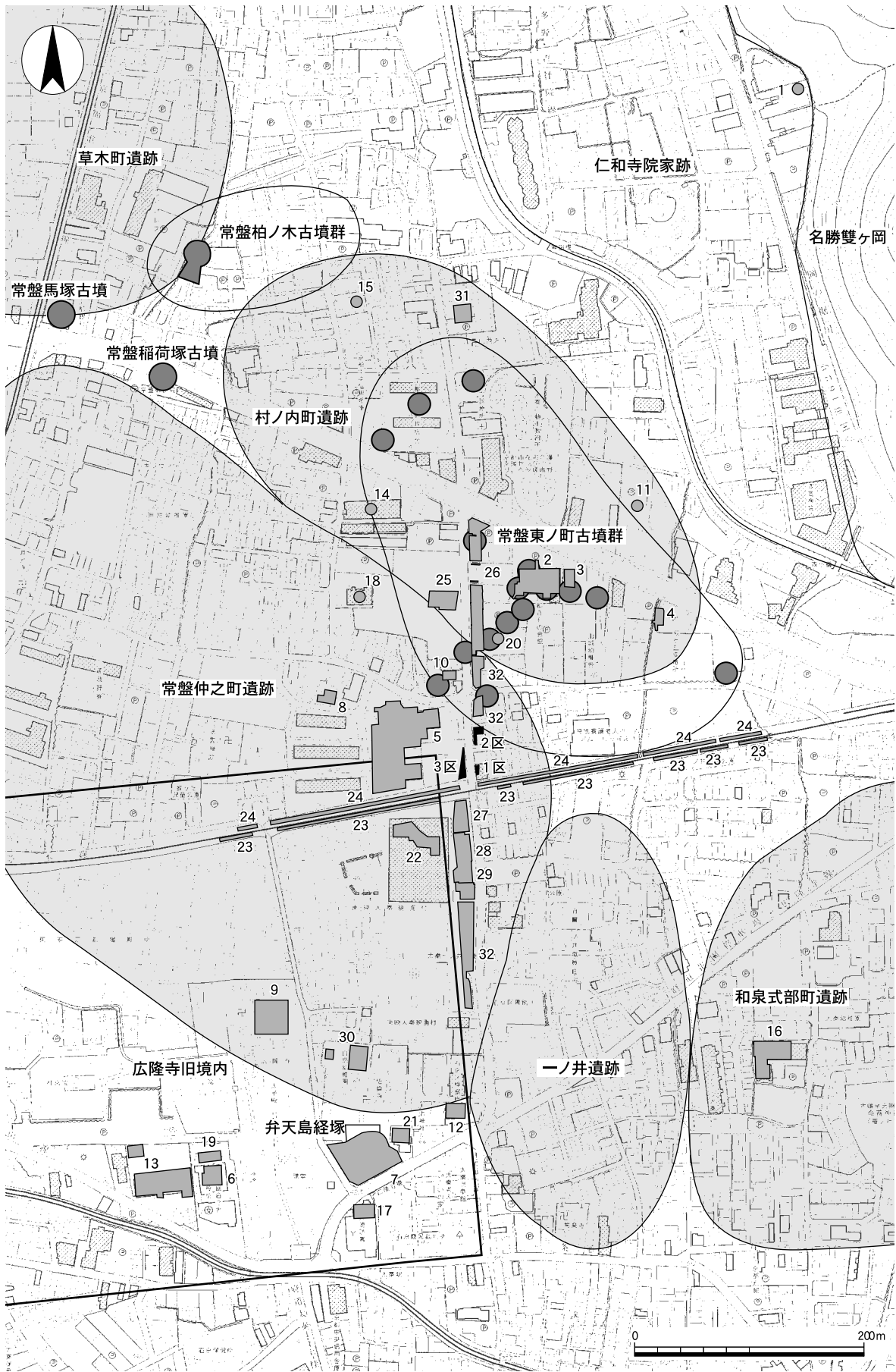


図6 調査地と周辺の遺跡 (1 : 5,000)



表1 周辺調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文献
1	1974	発掘	1974.11.01～1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	「平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	「常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	「仁和寺子院跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～1978.02.11	弁天島経塚の調査。平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～1978.02.18	室町の柱穴・土坑	「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・埴輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡-右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要-』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘製造遺構	「広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	「和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	「広隆寺旧境内1」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	「広隆寺旧境内2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	「広隆寺旧境内」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構など	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳～飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・溝など	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居など	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘	2008.11.10～2009.03.17	古墳後期～飛鳥の竪穴住居、古墳後期の横穴式石室など	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
27	2008	発掘	2009.01.20～2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の土坑・溝・落込など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
28	2009	発掘	2009.12.14～2010.03.12	飛鳥の竪穴住居、平安の区画施設・溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
29	2009	発掘	2009.12.14～2010.02.02	飛鳥の竪穴住居、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
30	2010	発掘	2010.05.06～2010.06.22	平安中期～後期の土坑・溝・柱列、中世の土坑・溝など	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
31	2010	発掘	2010.05.06～2010.06.10	縄文中期の土坑、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・土坑、中世の建物・柱列・土坑など	『村ノ内町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
32	2010	発掘	2010.11.22～2011.03.11	飛鳥の竪穴住居・土坑・溝、平安中期の建物・井戸・土坑・溝、鎌倉～室町の土坑・溝・集石遺構など	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-15 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年

※ Noは図6の調査地点の数字と対応

東に位置している。当地周辺では縄文時代以降、特に古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした集落や古墳・古墳群、寺院などの遺跡が展開している。

縄文時代 北に位置する村ノ内町遺跡で土坑が検出され、中期末葉（北白川C式）の土器が出土した（調査31）。また、少量であるが、晩期の土器片も出土している。

弥生時代 村ノ内町遺跡では中期の遺構が確認されている。発掘調査（調査23・24）では竪穴住居が1棟（畿内第Ⅱ様式）、立会調査（調査11・15）では土坑や流路・遺物包含層が確認されている。また、南東の和泉式部町遺跡でも発掘調査で中期（畿内第Ⅳ様式）の竪穴住居1棟が検出された（調査16）。御室川を遡った北西約2.5kmの梅ヶ畑の丘陵（梅ヶ畑遺跡）では、埋納されていた中期の銅鐸4個体が見つかった<sup>1)</sup>。

古墳時代 和泉式部町遺跡では、前期の竪穴住居が14棟、中期の竪穴住居が7棟検出された（調査16）。中期の竪穴住居にはL字状に曲がる長い煙道を備えたものがあり、また初期須恵器や韓式系土器などが出土するなど、朝鮮半島との強い関連が窺える。

常盤仲之町遺跡（調査5・9・12・21・22・25・28・29）や村ノ内町遺跡（調査31）では、後期から飛鳥時代にかけての竪穴住居が多数検出されている。やや遺跡の範囲を広げると、西方の上ノ段町遺跡、多藪町遺跡、西野町遺跡などでも同時期の竪穴住居が多く検出されており、後期以降に嵯峨野地域において人口の急増がみられる。

嵯峨野地域では古墳の築造の開始が、同じ山城北部における他の地域にくらべて遅れることが知られており、西方にある中期末葉の垂箕山古墳<sup>2)</sup>が最初とされる。これ以降、嵯峨野地域の首長墓と考えられる大型の古墳は当地の周辺に展開する。特に後期後葉の双ヶ岡1号墳は当地周辺を一望できる双ヶ岡の最も高い一ノ丘に築かれた円墳（直径44m）で、巨石を用いた横穴式石室は当地周辺の南西方向に向けて開口している<sup>3)</sup>。また、後期には北嵯峨丘陵の南斜面を中心に多くの群集墳（円墳直径10～20m、横穴式石室）が営まれ、当地周辺では先の双ヶ岡においても二ノ丘から三ノ丘にかけて双ヶ岡古墳群が、平地部にも常盤東ノ町古墳群が展開する。常盤東ノ町古墳群は、同時期の集落遺跡である常盤仲之町遺跡に隣接しており、これまでに少なくとも円墳16基を確認しており（調査2・3・10・26）、それ以外にも古墳の周溝を検出している（調査32）。広隆寺旧境内においても後期の埴輪が採取されており、古墳が壊され埋没している可能性が考えられる（調査9）。

飛鳥時代 これまで調査例が少なく、その実態は不明であるが、当期に創建されたと考えられる広隆寺がある。同じ葛野郡内にやや先行して建てられた北野廃寺（北区北野白梅町）とともに、文献にみえる「広隆寺」の前身とされる「蜂岡寺」や「葛野秦寺」との関連が指摘されている。広隆寺旧境内の北東部は常盤仲之町遺跡に含まれており、現境内の調査（調査9・12・22～24）においても古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居が多数検出されており、寺院の建立との関連で注目される。当期の遺構は建物の基壇とみられる遺構（調査6）の他、溝・柱穴・土坑など（調査17）がある。

奈良時代以降 当地周辺では遺構検出例は多くないが、この時期の状況は徐々に明らかになり

つつある。常盤仲之町遺跡では、奈良時代の掘立柱建物（調査 27）、平安時代の区画施設や建物・土坑・溝など（調査 5・22・28・29）、また、鎌倉時代から室町時代の柱穴群や土壙墓群（調査 27～29・32）が検出されている。また、広隆寺旧境内遺跡でも平安時代以降の遺構が多数検出されており（調査 6・12・13・17・19・21）、調査 7 では旧境内南東部にあった平安時代後期の「弁天島経塚」が調査された。一ノ井遺跡は、明確な遺構は検出されていないが、平安時代以降の遺物散布地として知られている。広隆寺を中心としたこの地域独特の遺構の広がりが認められる。

註

- 1) 田辺昭三・佐原 真「京都市梅ヶ畑出土の銅鐸」『日本考古学協会昭和 39 年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1964 年
- 2) 垂箕山古墳は、中期末葉に位置付けられる全長 67 m 前方後円墳で、盾形の周濠・周堤を伴い、残存状況は良好である。仲野親王陵高島墓に指定されており、宮内庁管理である。片平大塚古墳ともいわれる。
- 3) 1980 年度に名勝公園として整備されるにあたり、発掘調査が実施された後、現地にて石室内に土囊などを詰めて埋め戻され保護・保存されている。  
『名勝双ヶ岡保存整備事業報告』昭和 55 年度 京都市文化観光局 1981 年

### 3. 遺 構

#### (1) 調査の概要

本年度の調査では、南北道路である城北街道の東側に2箇所（1・2区）、西側に1箇所（3区）の計3箇所で開催を実施した。1区は旧建物や敷設管などによる攪乱が著しく、全体の調査は不可能であったため、道路側の西壁の一部で断面観察を行った。2区は駐車場出入口と残土置場を敷地内で確保するため、調査区を3分割して反転調査を行った。3区は人力掘削時の残土置場を確保するため、南北2分割して反転調査を行った。調査面積は1区が約25㎡、2区が約118㎡、3区が約134㎡で、総計約280㎡であった。

2区は、去年の調査区と東西道路を挟んで南側に位置する。去年の調査成果と同様に鎌倉時代から室町時代の遺構を多数検出した。特に柱穴が密集しており、遺構の切り合いも多く、建物としては捉えられなかったが、これらは中世の活発な土地の利用状況を示している。また古墳時代から飛鳥時代の遺構を検出し、北西から南東方向の溝などを検出した。

3区は周辺の調査成果から遺構の遺存状況が良好であると予想されたが、地山層までほぼ削平されており、その面で平安時代から室町時代の遺構を検出した。礎石をもつ柱穴を多数検出し、なかでも門跡は城北街道に沿って築造されていることから、広隆寺の子院に関係している遺構であると推察される。



図7 1区（北東から）

#### (2) 1区の遺構（図7・8）

1区は前述のとおり断面観察のみである。基本層序は、地表下0.82mまで現代盛土、以下、10YR3/2黒褐色砂質土の耕作土層、0.88m以下、10YR5/6黄褐色～4/6褐色粘質土層の地山である。

表2 遺構概要表

調査区	時代	遺構
1区	近・現代	攪乱
2区	鎌倉時代～室町時代	柱穴、溝、土坑、土壇墓、集石遺構
	古墳時代以降	溝、土坑、小穴、落込
3区	鎌倉時代～室町時代	柱穴、溝、土坑
	平安時代	溝

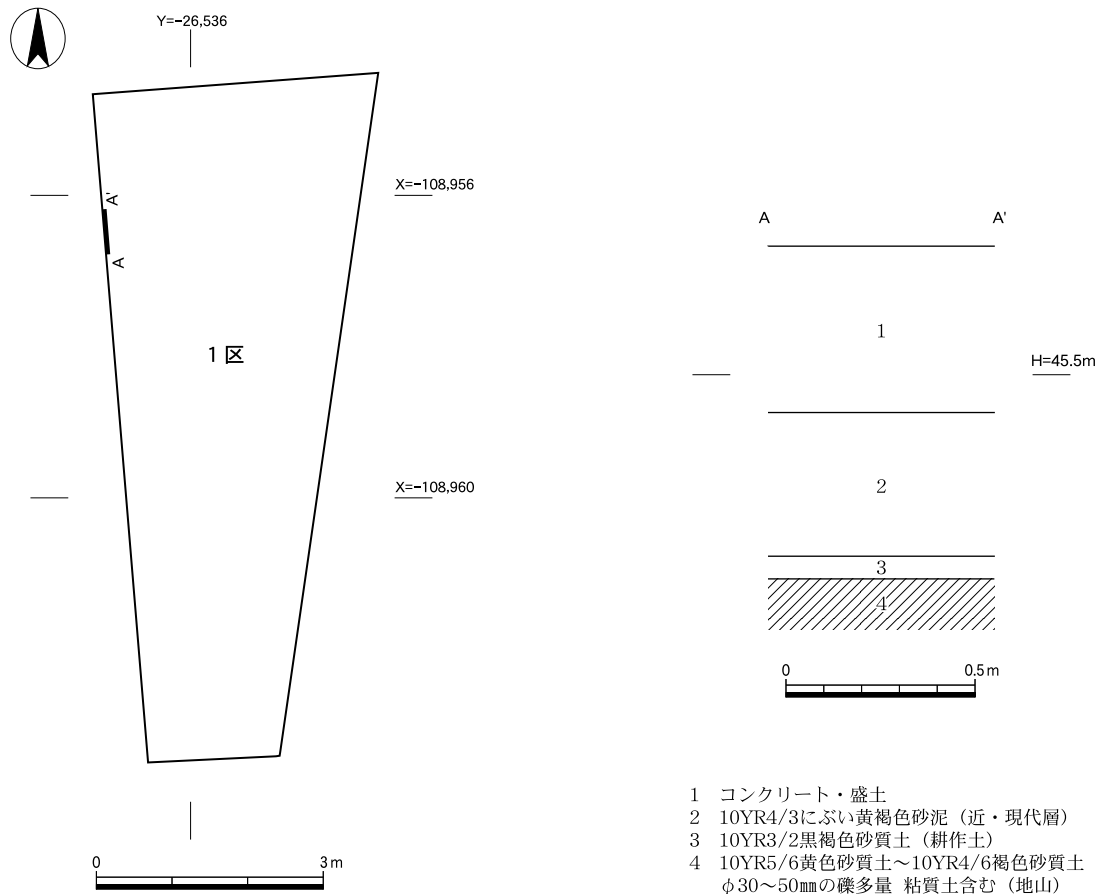


図8 1区平面図（1：100）、西壁柱状図（1：20）

### （3）2区の遺構（図9～12）

2区の基本層序は、地表下0.25mまで現代盛土、0.4mまで江戸時代の整地層、0.45mまで中世・平安時代の整地層、それ以下、2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土の地山である。

#### 1) 第1面（図9、図版1）

第1面は近世・中世の整地層を除去した面で検出した、中世から江戸時代の遺構である。小規模な礎石を据える柱穴を多数検出したが、遺構が複数切りあった状況で、建物としては捉えられなかった。

土坑19（図13、図版3） 調査区の北端で室町時代後半の土師器を多量に含む、長径0.88m・短径0.7mの楕円形の土坑19を検出した。この土坑からは長径35cm・短径25cmの石が1石出土した。石は土坑のほぼ中央で検出したが、土坑内に据えられたものとは判定しにくい。埋土には炭が少量混入しており、骨を確認していないが、墓であると思われる。

集石41（図14、図版3） 調査区の南東付近で、東西幅2.2m以上・南北幅3.2mの範囲に径5～60cm大の石が多量に投棄された状態で検出した。これらの石は北から続く溝40を埋めて整地するために投棄された可能性がある。埋土からは青磁椀・瓦器鍋などが出土した。また、その



図9 2区第1面平面図 (1:100)

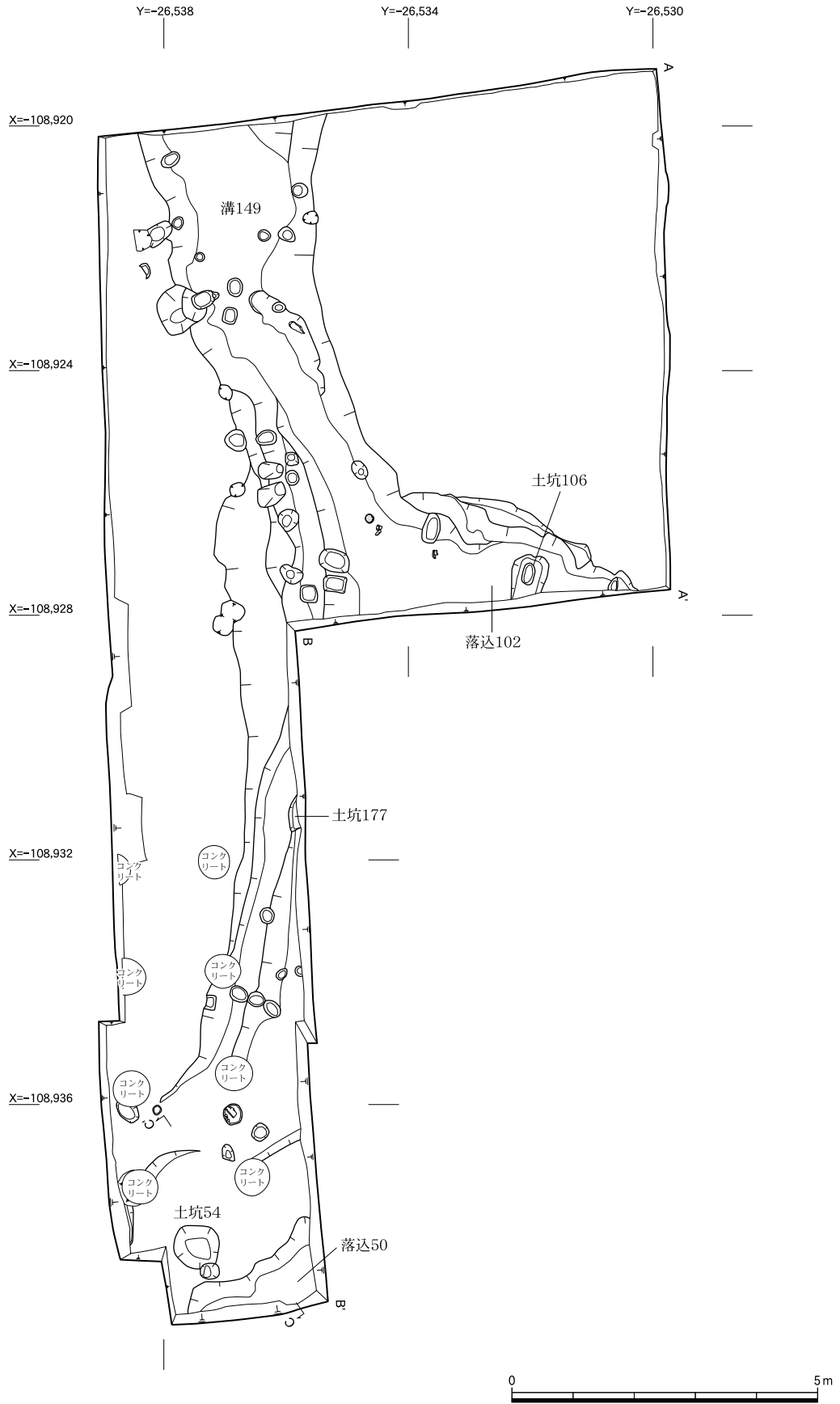
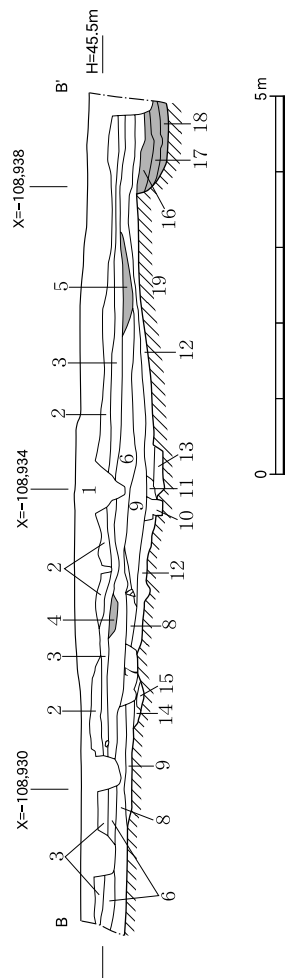
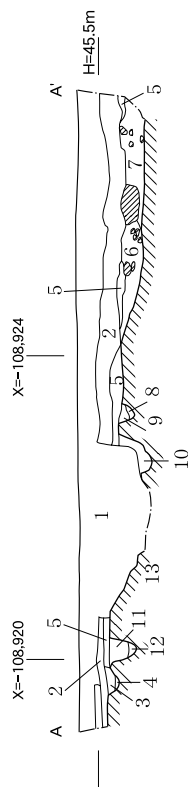


図10 2区第2面平面図 (1:100)

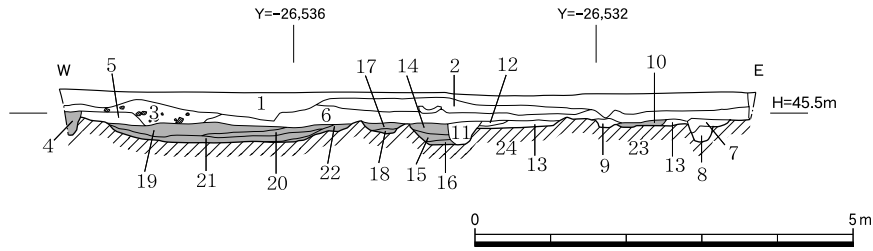
- 1 盛土・攪乱
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+10YR4/4褐色砂質土 土師器・炭・φ10~20mmの礫少量 (中世整地層)
- 3 10YR3/2黒褐色砂質土+2.5Y3/3暗オリーブ色砂質土 土師器・φ5mmの礫中量 (中世整地層)
- 4 2.5Y3/2黒褐色砂質土 φ5~10mmの礫中量
- 5 10YR4/2灰黄褐色砂質土+10YR4/4褐色砂質土 地山ブロック多量混
- 6 10YR4/2灰黄褐色砂質土 φ5~10mmの礫・φ50~100mmの礫・土師器中量
- 7 10YR4/2灰黄褐色砂質土 φ50~150mmの礫・土師器・炭少量 (落込45)
- 8 10YR3/2黒褐色砂質土+2.5Y3/3暗オリーブ色砂質土 土師器・φ5mmの礫中量
- 9 2.5Y3/2黒褐色砂質土 φ5~10mmの礫中量
- 10 2.5Y3/2黒褐色砂質土 φ5~10mmの礫中量
- 11 10YR3/4暗褐色砂質土
- 12 10YR3/3暗褐色粘質土
- 13 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト



- 1 盛土・攪乱
- 2 10YR3/3暗褐色砂質土 土師器小片・φ10~20mmの礫少量 (中世整地層)
- 3 10YR3/4暗褐色砂質土 土師器極小片・炭少量 (中世整地層)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+粘質土 土師器極小片・φ30~50mmの礫少量 (溝143)
- 5 10YR3/3暗褐色砂質土 粘まりなく砂質強い (溝18)
- 6 10YR3/3暗褐色やや粘質土+10YR3/4暗褐色やや粘質土 土師器小片・炭少量  
10YR4/4褐色ブロック含む
- 7 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR3/4暗褐色砂質土 φ10~50mmの礫
- 8 10YR3/2黒褐色粘質土+10YR3/3暗褐色粘質土・粘質土 φ10~30mmの礫・炭少量
- 9 10YR3/3暗褐色砂質土やや粘質 土師器極小片・炭少量
- 10 10YR2/2黒褐色粘質土+10YR3/3暗褐色粘質土 φ30~50mmの礫中量
- 11 10YR3/2黒褐色粘質土+10YR4/6褐色粘
- 12 10YR3/2黒褐色粘質土+10YR3/3暗褐色粘質土+10YR4/4褐色土 地山ブロック多量 硬く締まる
- 13 10YR4/2灰黄褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 12層より粘質強い φ~5mmの礫少量
- 14 10YR2/3褐色粘質土 φ~50mmの礫少量・炭・焼土 (土坑177)
- 15 10YR3/4暗褐色粘質土 地山ブロック混
- 16 10YR3/4暗褐色粘質土 地山ブロック・φ2~3mmの礫少量
- 17 10YR3/3暗褐色粘質土+7.5YR4/3褐色粘質土 粘質強い 地山ブロック中量 φ5mmの礫少量 (落込50)
- 18 10YR3/2黒褐色粘質土 地山ブロック多量 φ30~50mmの礫少量
- 19 10YR4/4褐色砂質土+10YR7/2にぶい黄褐色粘状+10YR5/8黄褐色粘状 硬く締まる (地山)

図 11 2区東壁断面図 (1 : 100)





- 1 盛土・攪乱
- 2 10YR3/3暗褐色砂質土 土師器・炭多量 φ30~50mmの礫中量
- 3 10YR2/3黒褐色砂質土 縮まりなし φ30~70mmの礫多量
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘質土+10YR5/2灰黄褐色粘質土 φ10~20mmの礫少量 (溝107)
- 5 10YR2/3黒褐色砂質土+10YR2/2黒褐色砂質土 縮まりなし φ20~30mmの礫中量
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+10YR4/4褐色砂質土 土師器・炭・φ10~20mmの礫少量
- 7 10YR3/2黒褐色砂質土+2.5Y3/3暗オリーブ色砂質土 土師器・φ5mmの礫中量
- 8 2.5Y3/2黒褐色砂質土 φ5~10mmの礫中量
- 9 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR5/4にぶい黄褐色砂質土 φ10~20mmの礫多量
- 10 10YR2/3黒褐色砂質土 土器片含む (溝40)
- 11 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR3/4暗褐色砂質土 φ5~10mmの礫中量 (柱穴95)
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色やや粘質土 φ10~50mmの礫中量
- 13 10YR4/2灰黄褐色砂質土+10YR4/4褐色砂質土 地山ブロック多量混
- 14 10YR3/3暗褐色砂質土 φ30~50mmの礫多量
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土~10YR3/3暗褐色砂質土 φ5mmの礫中量
- 16 10YR4/4褐色砂質土地山混 φ5~10mmの礫中量
- 17 10YR4/2灰黄褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 縮まり強い
- 18 10YR4/2灰黄褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 地山ブロック多量混 (溝143)
- 19 10YR3/3暗褐色粘質土~10YR2/3黒褐色粘質土 φ20~40mmの礫少量
- 20 10YR3/3暗褐色砂質土~10YR2/3黒褐色砂質土 φ20~40mmの礫少量 縮まりなし
- 21 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR3/4暗褐色砂質土 やや粘質 縮まり強い 炭少量 φ5mmの礫中量 (溝149)
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+10YR4/4褐色砂質土 地山ブロック少量混 φ10~20mmの礫少量
- 23 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土+2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土中量 φ5~10mmの礫多量 (地山)
- 24 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト (地山)

図12 2区北壁断面図 (1:100)

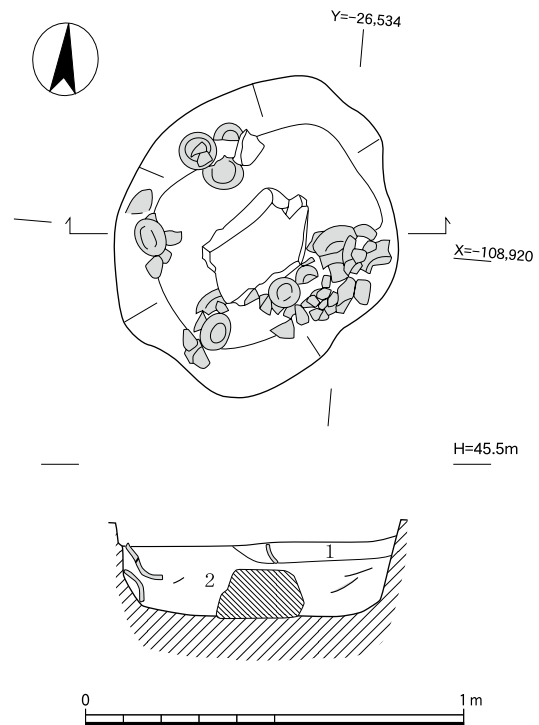
下面からは室町時代後半の土坑 145、土坑 74、柱穴などを検出した。

土坑 74(図 14) 集石 41 の下層から検出した。上部は削平され、複数の遺構が切りあっていたため形状は明確ではない。東西・南北長 0.7 m 以上で、埋土から完形の土師器皿が出土した。

土坑 145 (図 14) 集石 41 の下層から検出した。東西 1.2 m・南北 1.3 m の円形で、完形品を含む土師器皿や須恵器・瓦器などが出土した。土坑 19 と同じく墓の可能性はある。

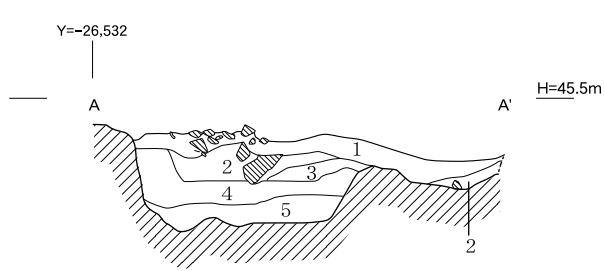
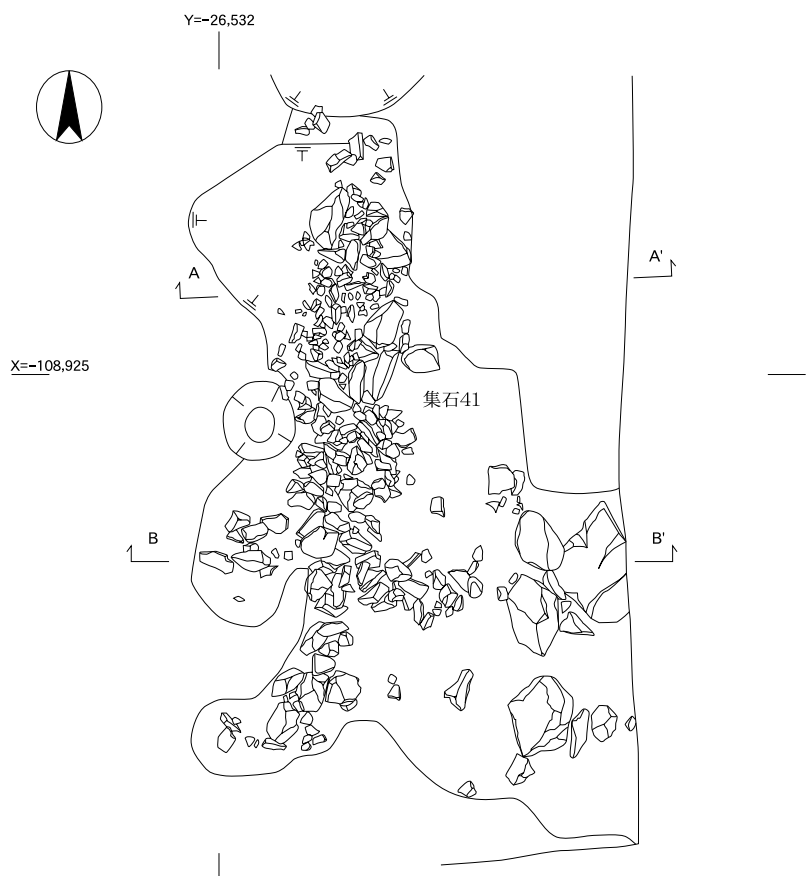
落込 45 (図 14) 調査区東端で検出した。径 5 ~ 50 cm の石が投棄された状態であった。調査区外へ延長するため規模は不明であるが、溝の可能性もある。

溝 18 (図 17) 調査区の南部で検出した。上部は削平されており、幅約 0.5 m、3.2 m 分確認した。北東から南西に傾くが、底面はほとんど

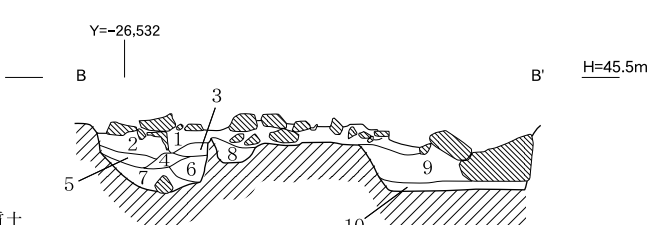


- 1 10YR2/3黒褐色砂質シルト+2.5Y7/6明黄褐色粘土質シルト
- 2 10YR2/3黒褐色砂質シルト

図13 2区土坑 19 実測図 (1:20)



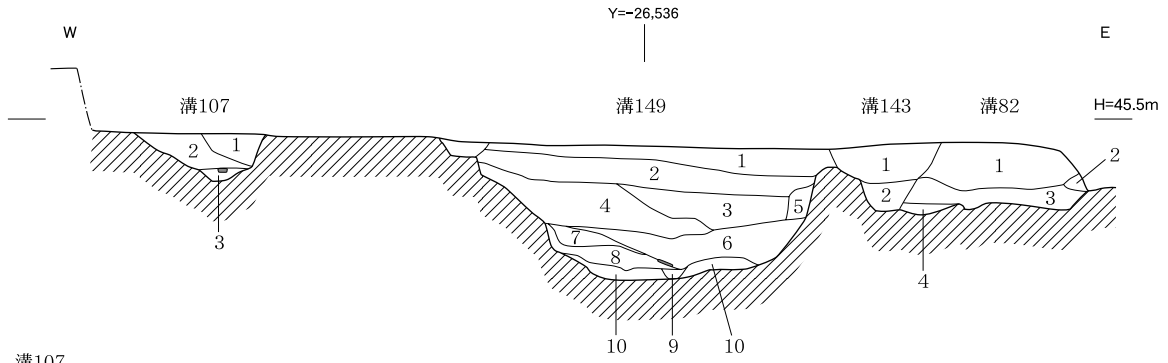
- 1 10YR3/4暗褐色砂質土 土師器片 φ20~100mmの礫多量
- 2 10YR3/3暗褐色砂質土 土師器片少量
- 3 10YR5/4にぶい褐色砂質土 φ20~50mmの礫多量
- 4 10YR2/3黒褐色砂質土 シルト・土師器多量
- 5 10YR4/2灰黄褐色砂質土 土師器少量 地山ブロック混 (土坑145)



- 1 10YR3/4暗褐色砂質土
- 2 10YR3/2黒褐色砂質土 炭少量
- 3 10YR3/3暗褐色砂質土 やや粘質
- 4 10YR2/3黒褐色粘質土
- 5 10YR2/3黒褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂質粘質土 (土坑74)
- 6 10YR2/1黒色砂質土
- 7 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR6/2灰黄褐色砂質土
- 8 10YR3/3暗褐色砂質土
- 9 10YR3/3暗褐色砂質土
- 10 10YR3/2黒褐色砂質土粘質 (落込45)



図14 2区集石41 および下面遺構実測図 (1:40)



溝107

- 1 10YR4/3にぶい褐色砂質土 締まりなし
- 2 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 φ3mmの礫混
- 3 10YR2/3黒褐色砂泥 粘質 φ5mmの礫混

溝149

- 1 7.5YR3/3暗褐色砂質土 φ20~50mmの礫少量
- 2 10YR3/2黒褐色砂質土+10YR3/3暗褐色砂質土 φ5~30mmの礫・炭少量
- 3 10YR3/2黒褐色砂質土+10YR2/3黒褐色砂質土 やや粘質 φ~5mmの礫・炭少量
- 4 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR2/3黒褐色砂質土 地山ブロック混 φ20~50mmの礫少量
- 5 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR2/3黒褐色砂質土 地山ブロック多量混 φ20~50mmの礫少量
- 6 10YR2/2黒褐色砂質土+10YR2/3黒褐色砂質土 地山ブロック粒状に混
- 7 10YR4/2灰黄褐色砂質土+10YR4/4にぶい黄褐色粘土(地山?) 多量
- 8 10YR2/1黒褐色粘質土+10YR2/2黒褐色粘質土 地山ブロック多量
- 9 10YR3/2黒褐色粘質土+10YR3/3暗褐色粘質土
- 10 10YR3/4暗褐色砂質土 地山(10YR5/8) 多量混

溝143

- 1 7.5YR3/3暗褐色砂質土 φ20~50mmの礫少量
- 2 7.5YR3/3暗褐色砂泥 粘質

溝82

- 1 10YR3/3暗褐色砂泥 φ40~60mmの礫少量
- 2 10YR6/6明黄褐色粘土 地山ブロック
- 3 10YR3/4暗褐色砂泥やや粘質 2層ブロック混
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥粘質 2層ブロック多量混

図15 2区 X=-108,924 ラインセクション断面図 (1:40)



- 1 10YR3/3暗褐色砂質土+10YR3/4暗褐色砂質土 やや粘質 緻密 炭少量

図16 2区溝149実測図 (1:40)

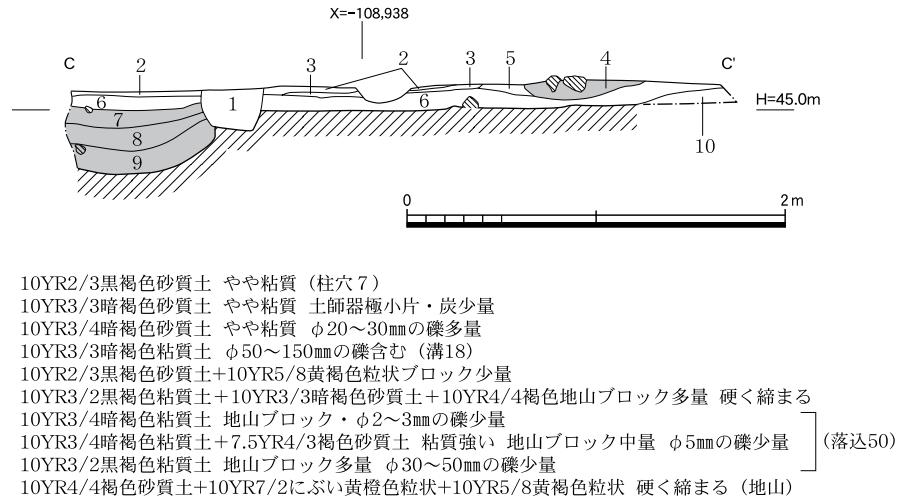


図 17 2区落込50・溝18セクション断面図 (1:40)

平坦で流れの方向は不明である。一部に10~20cm大の石が敷かれる。東西両側は調査区外へと延長する。

溝40 調査区東部で検出した南北方向の溝である。東西幅0.6~1.1m、南北4.7mに渡って検出した。南端は徐々に浅くなり土坑145付近で終息する。この溝は2010年度調査の2区で検出した溝の延長と思われる。出土遺物は少量で細片であるが、土師器・須恵器・瓦器がある。

溝82(図15) 調査区中央で検出した南北方向の溝である。東西幅1.2~1.7m、南北7.2mに渡って検出した。溝の東西両肩は二段に落ち、西肩は溝143と一部共有する。南端は確認徐々に浅くなり終息する。遺物の出土は極少量である。

溝143(図15) 調査区中央で検出した南北方向の溝である。東西幅0.3~0.4m、南北8mに渡って検出した。断面U字形のやや湾曲した南北方向の溝である。途中調査区外となり途切れるが、調査区南西部でさらに2m検出した。この溝も徐々に浅くなり終息する。出土遺物は少量であるが、平安時代後期の土師器皿や軒平瓦が出土した。

溝17・107(図15) 調査区西部で検出した溝である。南部で検出した溝17と北部で検出した溝107は溝の形状などから同一の溝であると判断した。東西幅約0.4m、南北17mに渡って検出した。断面はU字形で北西から南東方向、後に北東から南西方向に向きを変える。出土遺物は土師器・須恵器・瓦器などがある。

## 2) 第2面(図10、図版2)

第2面は地山上面で遺構検出を行い、古墳時代から飛鳥時代の土坑、溝、落込を検出した。溝は湾曲しており、古墳の周溝の可能性もある。落込は北肩部のみで、検出幅もわずかであるが、溝になる可能性がある。調査区南端では古墳に関連すると思われる鉄製金具や耳環が出土した。

溝149(図15・16、図版3) 調査区中央西寄りで検出した、北西から南東方向の溝で、湾曲して南流する。溝の規模は、調査区北端では幅2.9m・深さ0.3m、調査区南東部では深さ約0.6

mと深くなり、東に向きを変える。南西部では西肩部のみの検出で、南端は緩やかになり、東方向に向かう。溝が合流もしくは分岐している可能性もあるが、調査区外となるため、流れの方向は不確定である。出土遺物は古墳時代から飛鳥時代の須恵器台付き壺・器台などがあり、出土遺物からみて、古墳に関わる溝の可能性も考えられる。

落込 50 (図 17) 調査区南端で検出した南西から北東方向の溝状遺構である。北肩部のみの検出であるが、堆積状況などから溝であると思われる。飛鳥時代の遺物が出土した。

土坑 54 (図版 3) 調査区南端で検出した、径 0.7 ~ 0.8 m の円形の土坑で、土坑上面で耳環が出土した。この土坑の検出中に金属製の帯金具が出土したが、この遺構に伴うかは不明である。

土坑 106 調査区東部南壁付近で検出した、焼土・炭を含む土坑である。南は調査区外となるため東西 0.52 m ・南北 0.48 m を確認するに留まる。溝 149 の底面から検出した。

土坑 177 調査区南西部、東壁付近で検出した、焼土・炭を含む土坑である。また、溝 149 の西肩付近である。上部は他の遺構に削平される。南北幅 0.7 m を確認したが、東は調査区外へと広がる。

#### (4) 3区の遺構 (図 18・19、図版 4)

3区の基本層序は、北部では地表下 0.7 m まで現代盛土、0.8 m まで近代の整地層、0.9 m まで江戸の整地層、以下、10YR7/6 明黄褐色細砂・粗砂の地山となる。遺構は北端以外、ほとんど地山面で検出した。調査区中央付近から南部は現代盛土が厚く堆積し、南端で約 0.9 m 下がる。調査区東側は道路との間にある擁壁のコンクリート基礎により、観察不可能であった。

門 1 (図 20、図版 5) 調査区中央で検出

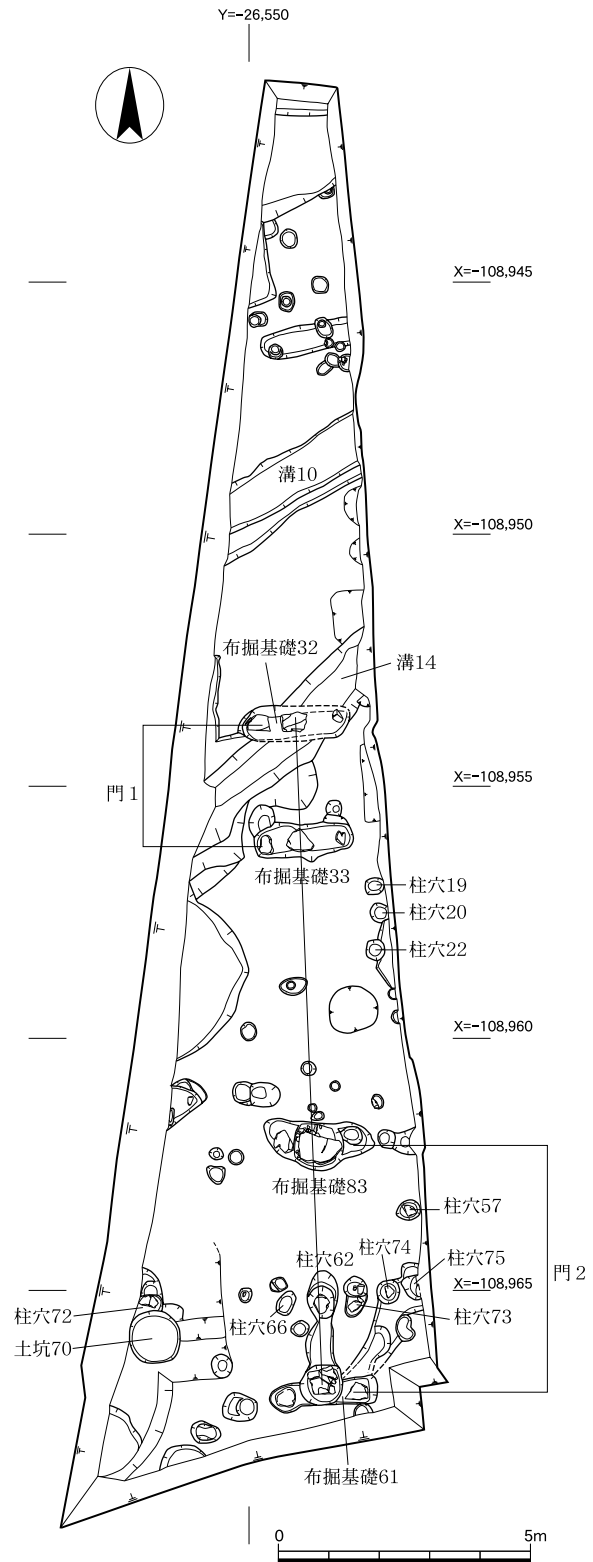


図 18 3区平面図 (1 : 150)

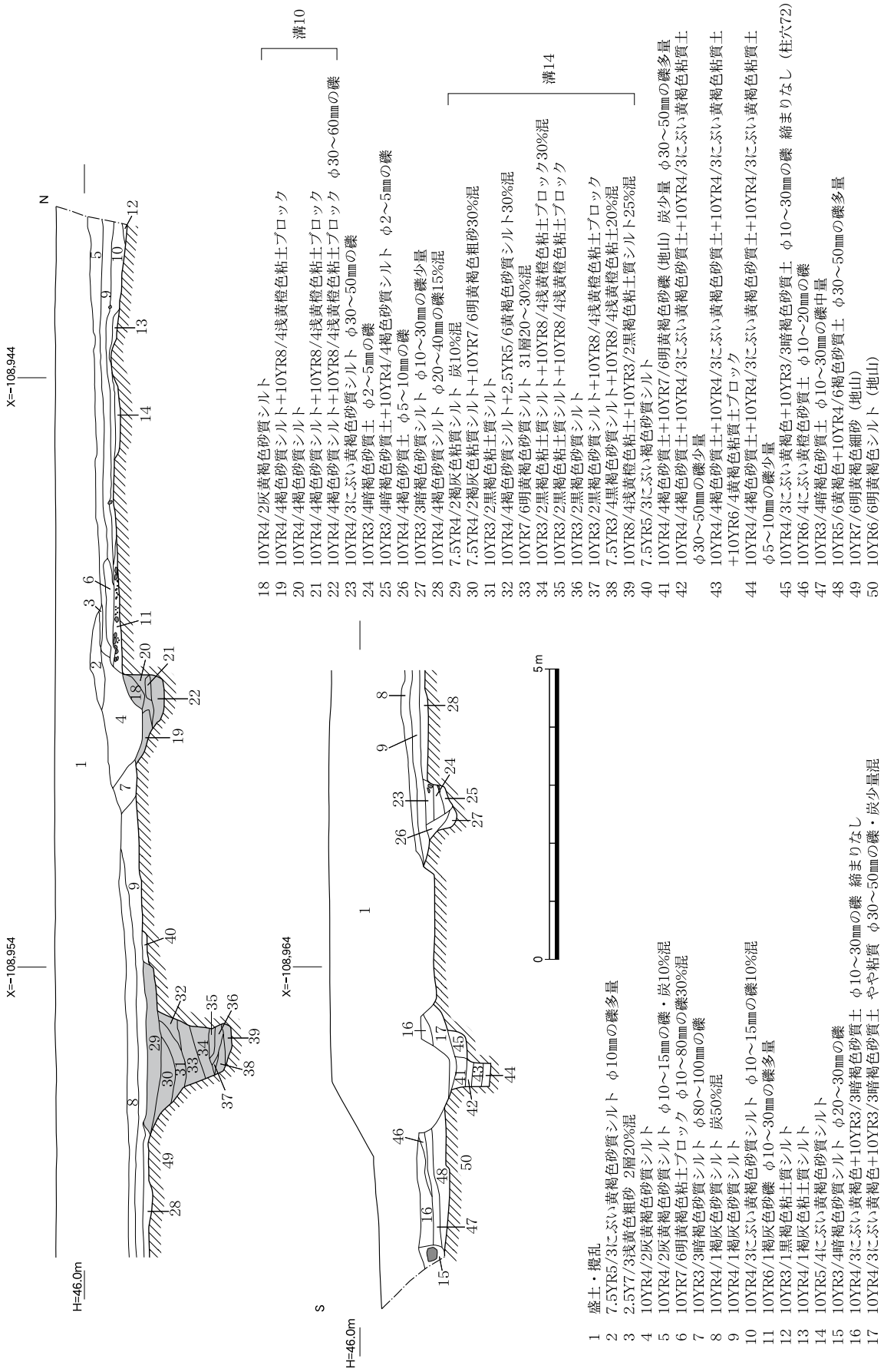
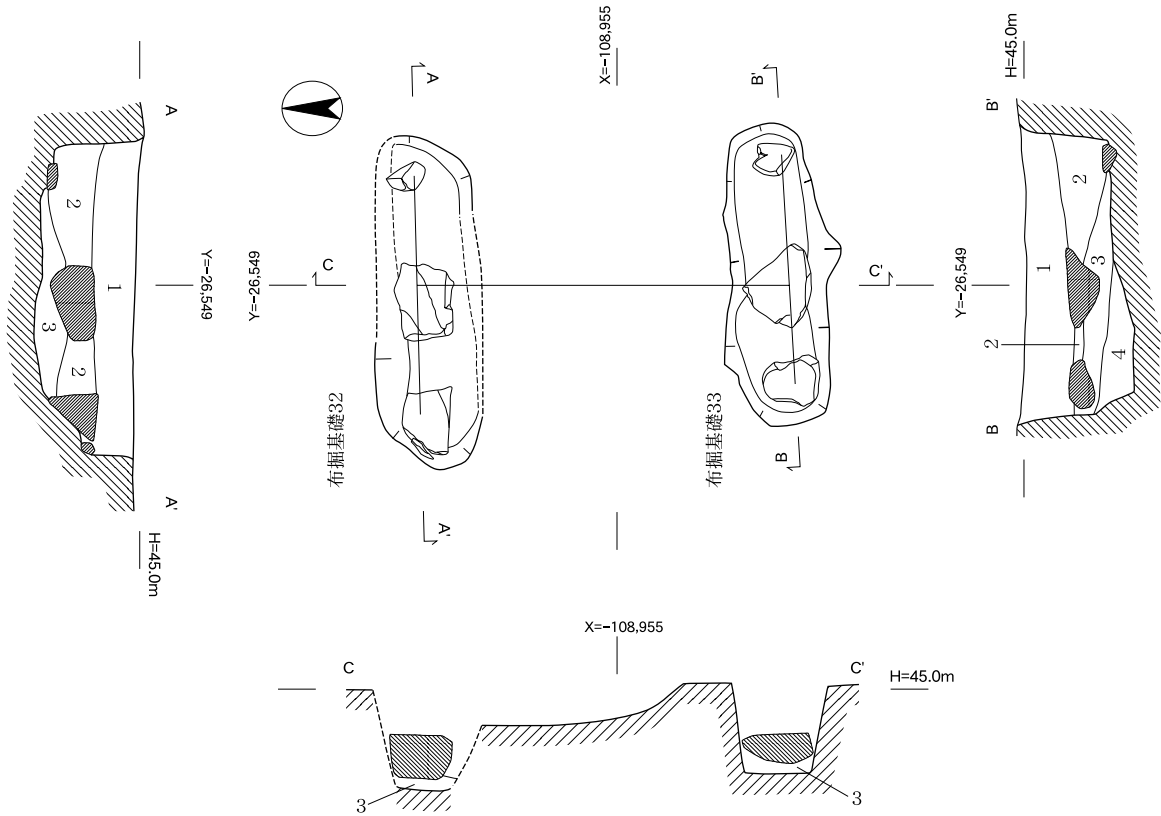


図 19 3区西壁断面図 (1 : 100)

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 盛土・攪乱</p> <p>2 7.5YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト φ10mmの礫多量</p> <p>3 2.5Y7/3浅黄色粗砂 2層20%混</p> <p>4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト</p> <p>5 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト φ10~15mmの礫・炭10%混</p> <p>6 10YR7/6明黄褐色粘土ブロック φ10~80mmの礫30%混</p> <p>7 10YR3/3暗褐色砂質シルト φ80~100mmの礫</p> <p>8 10YR4/1褐灰色砂質シルト 炭50%混</p> <p>9 10YR4/1褐灰色砂質シルト</p> <p>10 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト φ10~15mmの礫10%混</p> <p>11 10YR6/1褐色粘土質シルト φ10~30mmの礫多量</p> <p>12 10YR3/1黒褐色粘土質シルト</p> <p>13 10YR4/1褐色粘土質シルト</p> <p>14 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト</p> <p>15 10YR3/4暗褐色砂質シルト φ20~30mmの礫</p> <p>16 10YR4/3にぶい黄褐色+10YR3/3暗褐色砂質土 φ10~30mmの礫 縮まりなし</p> <p>17 10YR4/3にぶい黄褐色+10YR3/3暗褐色砂質土 やや粘質 φ30~50mmの礫・炭少量</p> | <p>18 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト</p> <p>19 10YR4/4褐色砂質シルト+10YR8/4浅黄褐色粘土ブロック</p> <p>20 10YR4/4褐色砂質シルト</p> <p>21 10YR4/4褐色砂質シルト+10YR8/4浅黄褐色粘土ブロック</p> <p>22 10YR4/4褐色砂質シルト+10YR8/4浅黄褐色粘土ブロック</p> <p>23 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト φ30~50mmの礫</p> <p>24 10YR3/4暗褐色砂質土 φ2~5mmの礫</p> <p>25 10YR3/4暗褐色砂質土+10YR4/4褐色砂質シルト φ2~5mmの礫</p> <p>26 10YR4/4褐色砂質土 φ5~10mmの礫</p> <p>27 10YR3/3暗褐色砂質シルト φ10~30mmの礫少量</p> <p>28 10YR4/4褐色砂質シルト φ20~40mmの礫15%混</p> <p>29 7.5YR4/2褐灰色粘質シルト 炭10%混</p> <p>30 7.5YR4/2褐灰色粘質シルト+10YR7/6明黄褐色粗砂30%混</p> <p>31 10YR3/2黒褐色粘土質シルト</p> <p>32 10YR4/4褐色砂質シルト+2.5YR5/6黄褐色砂質シルト30%混</p> <p>33 10YR7/6明黄褐色砂質シルト 31層20~30%混</p> <p>34 10YR3/2黒褐色粘土質シルト+10YR8/4浅黄褐色粘土ブロック30%混</p> <p>35 10YR3/2黒褐色粘土質シルト+10YR8/4浅黄褐色粘土ブロック</p> <p>36 10YR3/2黒褐色砂質シルト</p> <p>37 10YR3/2黒褐色砂質シルト+10YR8/4浅黄褐色粘土ブロック</p> <p>38 7.5YR3/4黒褐色砂質シルト+10YR8/4浅黄褐色粘土20%混</p> <p>39 10YR8/4浅黄褐色粘土+10YR3/2黒褐色粘土質シルト25%混</p> <p>40 7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルト</p> <p>41 10YR4/4褐色砂質土+10YR7/6明黄褐色砂質土(地山) 炭少量 φ30~50mmの礫多量</p> <p>42 10YR4/4褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 φ30~50mmの礫少量</p> <p>43 10YR4/4褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 +10YR6/4黄褐色粘質土ブロック</p> <p>44 10YR4/4褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 φ5~10mmの礫少量</p> <p>45 10YR4/3にぶい黄褐色+10YR3/3暗褐色砂質土 φ10~30mmの礫 縮まりなし (柱穴72)</p> <p>46 10YR6/4にぶい黄褐色砂質土 φ10~20mmの礫</p> <p>47 10YR3/4暗褐色砂質土 φ10~30mmの礫中量</p> <p>48 10YR5/6黄褐色+10YR4/6褐色砂質土 φ30~50mmの礫多量</p> <p>49 10YR7/6明黄褐色細砂(地山)</p> <p>50 10YR6/6明黄褐色シルト(地山)</p> |
|---|--|



- 1 7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト 炭10%混
- 2 7.5YR3/2黒褐色砂質シルト φ5~10mmの礫10%混
- 3 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト+10YR7/6明黄褐色粗砂15%混
- 4 10YR2/1黒色粘質シルト+10YR7/6明黄褐色粗砂25%混

図20 3区門1実測図(1:50)

した。東西に3石の礎石をもつ布掘基礎32・33で構成される。方位はいずれも座標西でやや南に振れる。規模は布掘基礎32が東西長2.2m・幅0.7m・深さ0.63m、布掘基礎33が東西長2.0m・幅0.65m・深さ0.64mである。ともに地山を掘り込んでいる。中央の礎石が親柱で、前後が控え柱の礎石となる。出土遺物は平安時代の瓦の小片が大半で、時期の確定はできない。柱間約2.4mで、門跡とみられる。いずれも東端の礎石が小さく、一段低い位置に据えられている。礎石間が狭く控えの出が少ないことから棟門とみられる。

門2(図21、図版5) 調査区南部で検出した。布掘基礎83、柱穴66・62・74、布掘基礎61で構成される。方位はいずれも座標西で南にやや振れる。布掘基礎83は中央に長径0.9mの大型の礎石をもつ。規模は東西長2.1m・南北幅約1.0mである。柱穴の上部は後世の遺構により削平されている。西側には小ぶりの礎石を据えるが、東側は礎石は確認できなかった。中央の礎石の掘形は両側の柱穴よりさらに掘り込み、礎石の下には5~10cm前後の根石をかませて安定させる。柱穴66・62・73の一群は、布掘基礎83と61の間で検出した。中央の柱穴62は、遺構の重複があるため掘形は明確ではないが、規模は南北0.6m・東西0.5m・深さ0.6mで、平面形は楕円形である。下部に土を入れて礎石を据える。柱穴66には礎石は確認できなかった。布掘基礎83と対になるもので門2とした。柱間は約3mである。布掘基礎61は調査区南端部で検出し

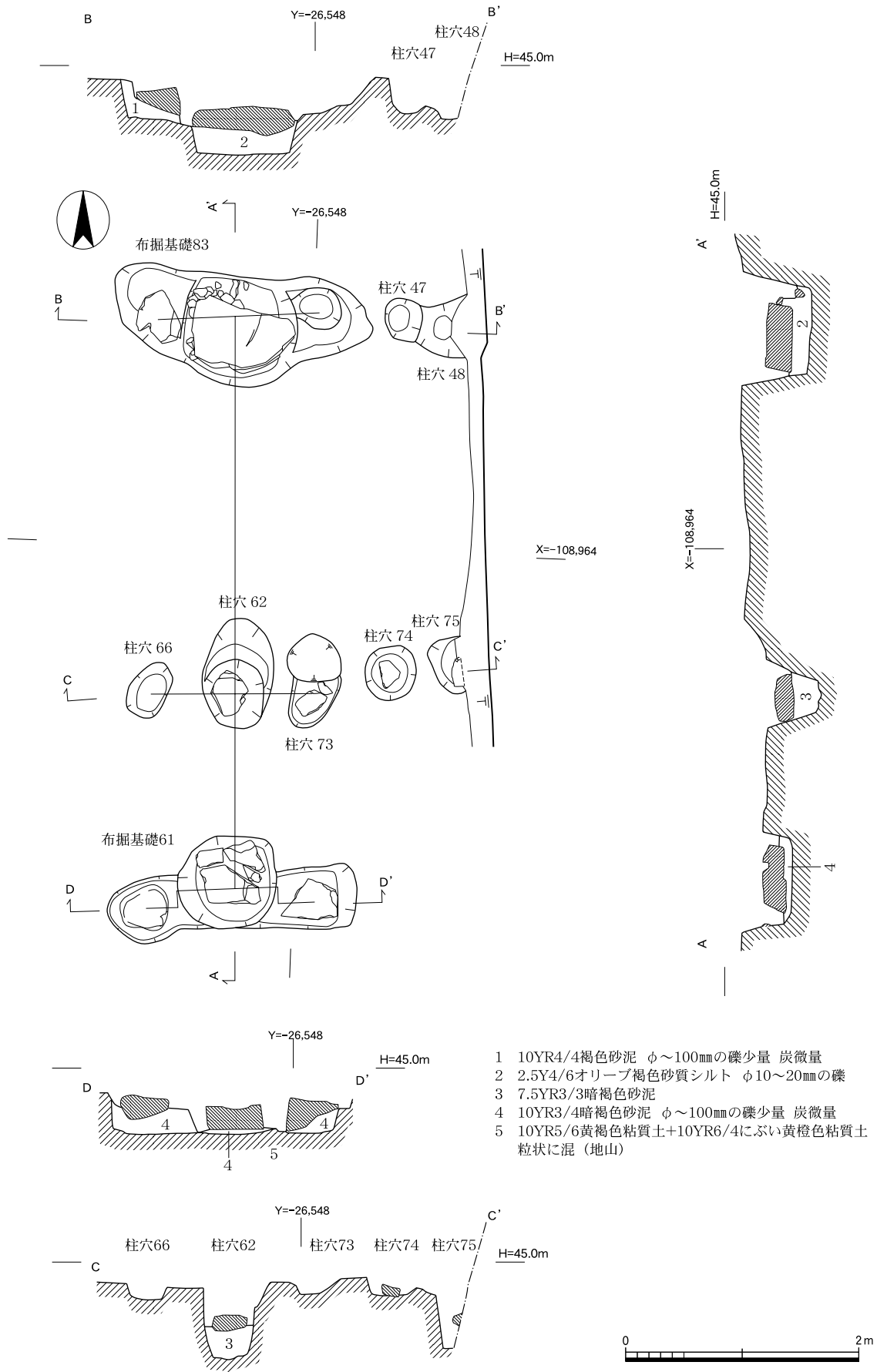
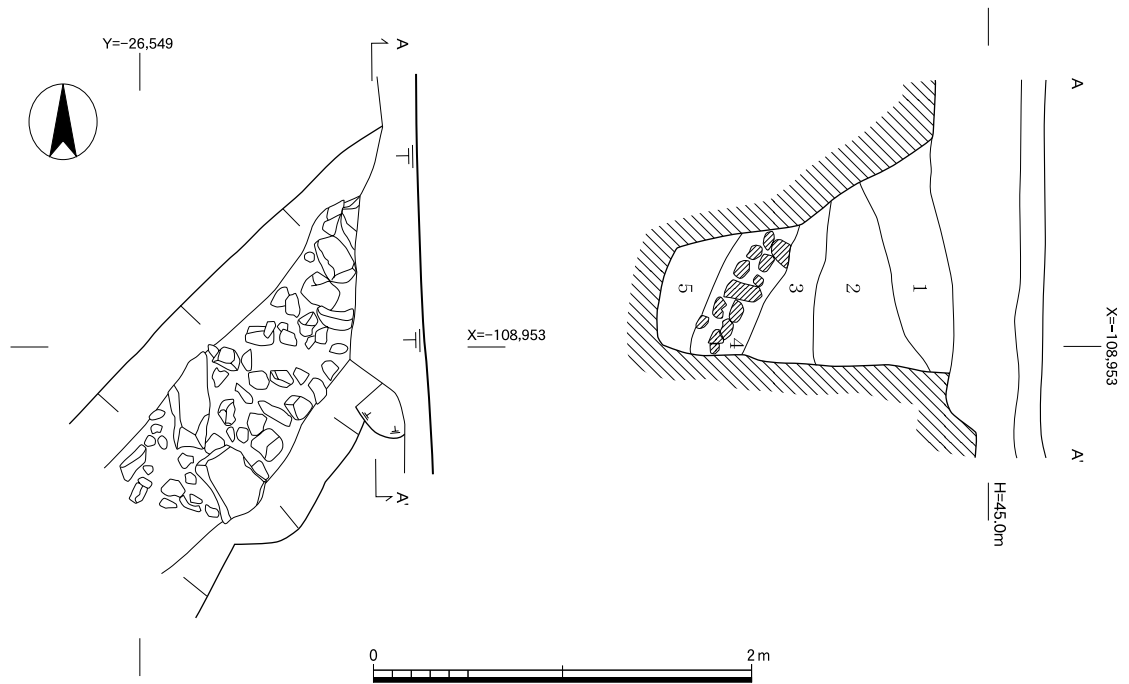


図 21 3区門2実測図 (1:50)





- 1 7.5YR3/4暗褐色粘土質シルト+2.5Y5/6黄褐色シルト 地山ブロック30%混
- 2 10YR3/2黒褐色粘質土シルト+2.5Y5/6黄褐色シルト 地山ブロック10~15%混
- 3 10YR3/2黒褐色粘質土シルト
- 4 10YR3/2黒褐色粘質土シルト+10YR8/4浅黄橙色粘土ブロック φ3~30cmの礫多量
- 5 10YR8/4浅黄橙色粘土+10YR3/2黒褐色粘質土シルト

図22 3区溝14実測図(1:40)

た。東端は削平されているため不定形であるが、規模は東西長2m・幅1m・深さ約0.4mで地山を掘り込む。底面は平坦で、礎石の上面をそろえるため下部に土をかませている。中央の礎石はやや北に張り出しており、礎石に合わせてこの部分の掘形は北へ広がる。上述の柱穴66・62・73と一連の門と考えられ、柱間は約1.2mである。門2の脇門と考える。出土遺物が微量なため時期は特定できない。

土坑70 調査区南西部で検出した遺構である。規模は径1.04mの円形で、上部は削平されているが、深さ0.76mを確認した。底面は平坦である。平安時代末期から鎌倉時代の瓦などが出土している。

溝10 調査区北半で検出した。規模は幅1.2~1.35m・深さ0.35~0.7m、北東から南西方向の溝で、東西とも調査区外へ延長する。方位は座標西に対して南へ約30度振れる。上部は削平されているが、断面は底面が平坦な逆台形である。中世の瓦片が出土した。

溝14(図22) 溝10の南側で検出した。規模は幅約1m・深さ1.7m、北東から南西方向の溝で、東西とも調査区外へ延長する。方位は座標西に対して南へ約41度振れる。底面は平坦で、断面形は上部がやや広がるが逆台形である。溝の東端から中央付近までに3~30cm大の角礫が、多数投棄された状態で混入していた。溝の埋土からは平安時代の瓦とともに平安時代中期の土師器や須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

出土した遺物は整理箱で20箱、内訳は、金属製品・石製品1箱、それ以外は土器・瓦類である。土器類には土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器などがある。その他、瓦類、金属製品、石製品、ガラス製品がある。

2区の出土遺物は整理箱に15箱ある。遺物の時期は古墳時代から江戸時代までで、時期別にみると鎌倉時代から室町時代のものが多くを占め、次いで飛鳥時代のものがある。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがあるが、大半が土器類である。

3区の出土遺物は整理箱で5箱ある。遺物の時期は平安時代から江戸時代までである。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがある。

以下では、調査区ごとに主要な出土遺物について概説する。

### (2) 2区の遺物（図23・24、図版6～8）

古墳時代から飛鳥時代

溝149（1～5）1は土師器の小型丸底壺である。口径7.3cm・器高10.1cmで、体部外面下半はケズリ、口縁部から体部にかけてナデ調整する。肩部はハケメ調整をし、ハケメを切るように沈線が1条巡る。口縁端部は丸くおさめる。外面には煤が付着する。2は須恵器台付き壺で、口縁部から頸部、脚部は欠損している。最大径15.3cm・残存高13.65cmで、脚部は貼付、透かしを

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代～飛鳥時代	土師器、須恵器、瓦、金属製品		土師器1点、土師質土器1点、須恵器4点、耳環1点、鉄製金具1点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、石製品		土師器2点、軒平瓦1点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、石製品		土師器20点、瓦器2点、輸入青磁1点、軒丸瓦1点、軒平瓦2点、砥石1点		
江戸時代	土師器、染付		土師器1点		
時期不明	ガラス製品		ガラス玉2点		
合計		25箱	41点（5箱）	0箱	20箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

三方につける。体部内外面はナデ調整を施す。体部外面下半に一部ケズリ調整が残る。焼成は良好で、胎土は密であるが長石・チャート粒を含む。3は須恵器の器台で、脚部は欠損する。口径25.9 cm・残存高5.8 cm、口縁部外面から内面にかけてナデ調整、外面の一部にカキメ調整を施す。焼成は良好で、胎土には長石・チャート・石英粒を含むが密である。4は須恵器の大型甕の下半部で、底部を欠損する。最大径51.9 cm・残存高36.6 cm、内面には同心円文の充て具痕跡が明瞭に残る。外面は格子状のタタキが施され、のちカキメ調整を施す。焼成は良好で、胎土には長石・チャート粒を含むが密である。5は土師質土器で、体部の一部のみである。最大径30.8 cm・残存高11.6 cm、体部外面に突帯を貼り付ける。外面はハケメ、内面上段はナデ、下段はハケメ調整を施す。突帯部分には貼り付け後にナデ調整を施す。色調はにぶい橙色、焼成は良好、胎土には長石・チャート・赤色粒子を含み、やや粗い。器種・器形は不明である。埴輪とも考えられたが、埴輪とすると器壁が薄いため、あえて土師質土器とした。

包含層(6) 6は須恵器器台の脚部のみである。脚部径14.3 cm・残存高5.4 cm、内外面ともに回転ナデ調整を施す。焼成は良好で、胎土には長石・チャート粒を含むが緻密である。調査区南端部の第2面検出中に出土した。

#### 平安時代

溝143(7・8) 7は土師器皿で口径9.8 cm・器高2.0 cm、2段ナデで口縁端部は立ちあがる。平安時代末期に属する。8は軒平瓦の小片であるが、平城6801Aの飛雲文軒平瓦に類似する。

#### 室町時代

土坑145(9～13) 9～13は土師器皿である。9は口径7.5 cm・器高1.65 cm、10は口径8.6 cm・器高1.7 cmの小型、11は口径11.1 cm・器高2.45 cm、12は口径12.1 cm・器高2.55 cmの中型、13は口径16.0 cm・器高3.0 cmの大型に分類される。いずれも口縁部は斜め上方に開く。室町時代後半に属する。

土坑74(14・15) 14・15は土師器皿で、14は口径7.3 cm・器高1.7 cm、15は口径8.7 cm・器高1.9 cmである。口縁部は斜め上方に開く。室町時代後半に属する。

土坑19(16～26) 16～26はいずれも土師器皿である。16～20は口径6.9～8.5 cm・器高1.6～2.0 cmの小型、21～24は口径11.1～12.6 cm・器高2.2～2.9 cmの中型、25は口径15.9 cm・器高2.7 cm、26は口径16.1 cm・器高2.9 cmの大型に分類できる。16・17・19は体部外面下半にオサエによる指圧痕が明瞭に残る。室町時代後半に属する。

集石41(27～30) 27は土師器皿で、口径6.9 cm・器高1.9 cm、底部中央を上方に突出させる。28は瓦器羽釜で、口径22.3 cm・残存高12.25 cmである。内面はハケメ調整、鏝下外面に指圧痕が残る。29は輸入青磁椀の底部である。削り出し高台で、高台内は露胎する。室町時代後半に属する。30は軒平瓦で、中心から左が欠損するが、菊花唐草文軒平瓦と思われる。中心飾りから唐草が3転し、外区に界線が配される。

柱穴42(31) 31は瓦器鍋で、口径22.4 cm・残存高8.5 cmである。口縁部は「く」字状に屈曲し、外面全体に煤が付着する。

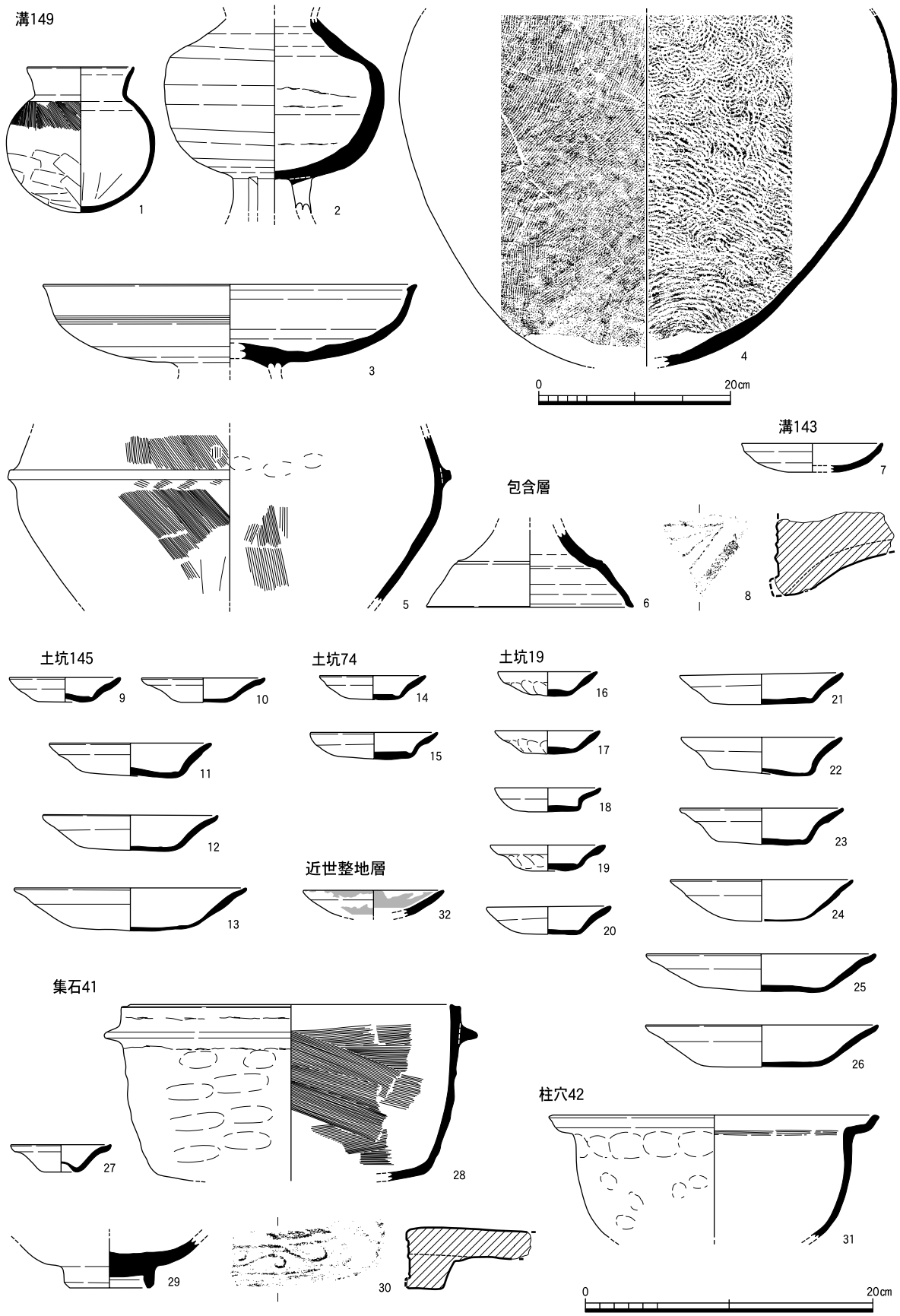


図23 2区出土遺物拓影・実測図 (1:4、4のみ1:6)

江戸時代

近世整地層 (32) 32は土師器皿で、口径9.7 cm・残存高2.1 cmである。内外面に漆が付着する。

その他の遺物

33は銅製の耳環で、おそらく金箔張りであったと思われる。一部欠損するが、残存径2.6 cm、断面は6×5 mmの楕円形である。34は鉄製金具で、長さ5.9 cm・先端部は幅5.0 cm、基部は幅4.0 cmで、尾錠は1.8 cm以上である。重さは47.29 gであるが、錆や付着物により、本来の形状・重量とは異なる。馬具もしくは装身具になる。33は土坑54上面で、34は包含層からの出土であるが、いずれも調査区南端部である。

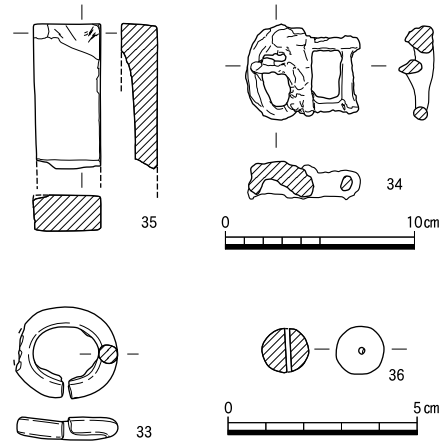


図24 2区出土その他の遺物実測図 (1:4、1:2)

35は砥石で、幅3.6 cm・残存長7.7 cm、先端の一部に使用痕が残る。集石41から出土した。

36はガラス玉で、径12 mmの球形である。中心をややずれて、1 mmの穴が貫通する。表面は二次的な要因で荒れているが、翡翠色を呈する。攪乱からの出土である。

37はガラス製のビーズ状である。濃い赤色で、中心に径0.5 mmの穴が貫通する。溝149検出中に出土した。

(3) 3区の遺物 (図25、図版8)

3区の出土遺物は、古墳時代の須恵器杯蓋・土師器甕、平安時代の土師器皿、緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・瓦類、鎌倉時代から室町時代の土師器・焼締陶器・瓦類、江戸時代の土師器・施釉陶器・伏見人形、鉄釘などがあるが、図化できる遺物はごくわずかである。大半が瓦類で軒丸瓦・軒平瓦の瓦当面が確認できるものを図化した。

平安時代

溝14 (38・39) 38・39は土師器皿の口縁部である。「て」字状口縁で、器壁は薄く、口縁端

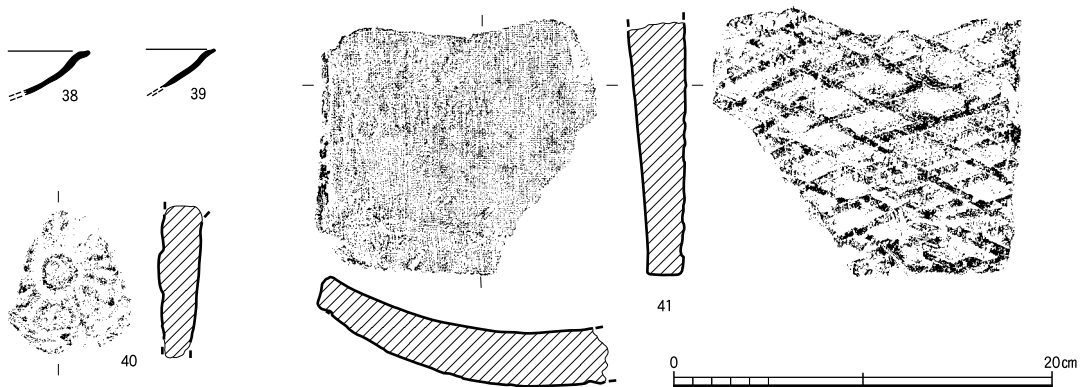


図25 3区出土遺物拓影・実測図 (1:4)

部は丸くおさめる。平安時代中期に属する。溝 14 からは小片ではあるが、緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器などが出土している。

#### 鎌倉時代

土坑 70 (40・41) 40 は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房の文様は不明であるが、2008 年度調査で出土した瓦と類似する。41 は平瓦で、外面は格子タタキ、内面に細かい布目を残す。鎌倉時代に属する。

## 5. ま と め

市道梅津太秦線（城北街道）の拡幅工事に伴う発掘調査としては、2008年度から継続して行われており、今回の調査は6次調査となる。調査地は遺跡の重複する地域で、古墳時代後期の常盤東ノ町古墳群の南端に位置し、また古墳時代後期から飛鳥時代を中心とする集落跡である常盤仲之町遺跡の東端に該当する。城北街道西側の3区は広隆寺旧境内の北東隅に隣接する。

2区では古墳に関連する耳環や鉄製金具が出土した。また、溝149からは須恵器の脚付壺や高杯などが出土している。古墳本体に関わる遺構は発見されなかったが、出土遺物からみて、この溝が古墳の周溝の一部になる可能性も考えられる。溝は調査区南端と中央では深さ約0.7m確認されたが、北端では約0.3mと浅くなり、底面形も平坦になる。昨年調査した北隣接地（調査

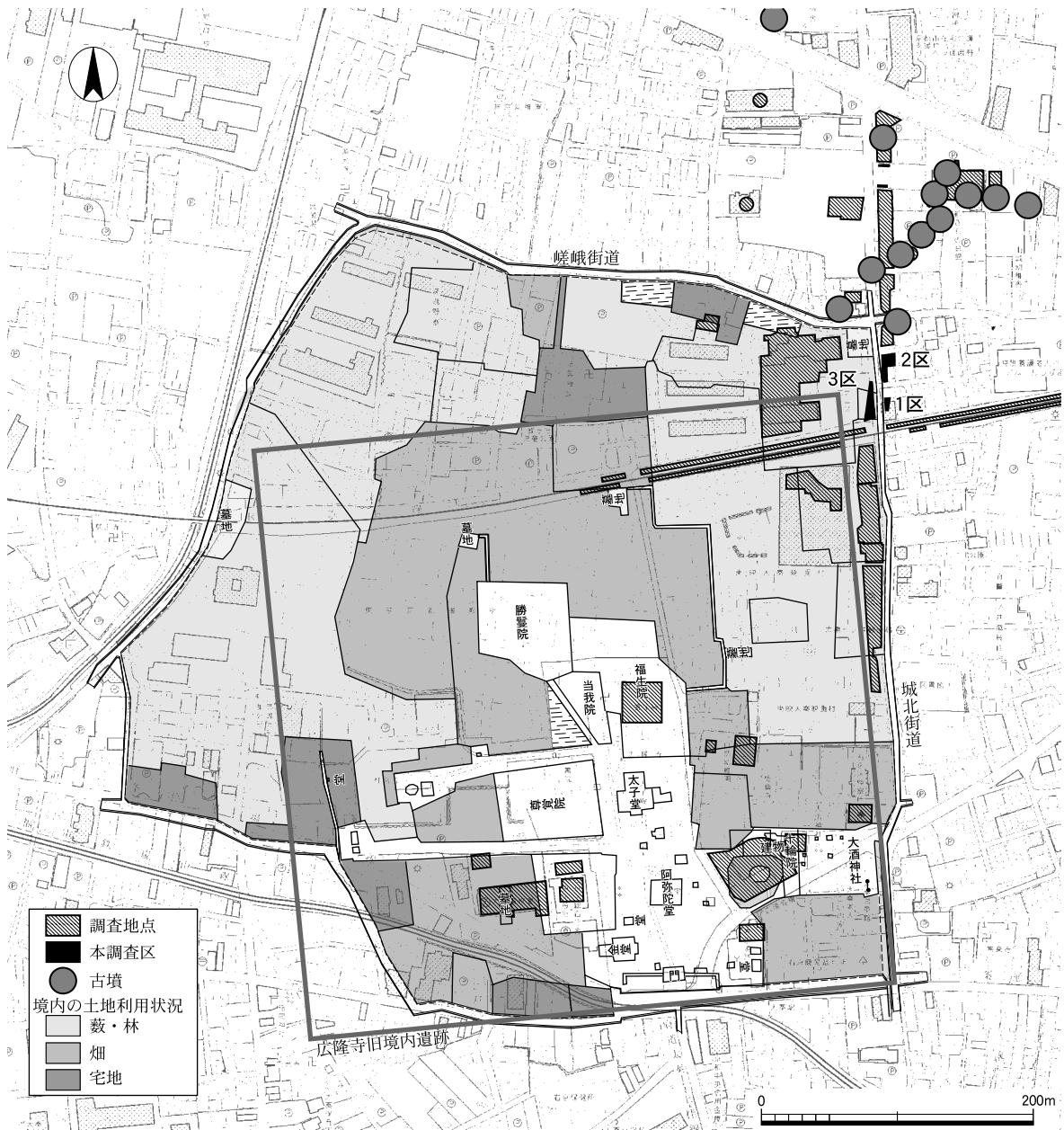


図26 広隆寺境内内外区別実測図および周辺調査位置図（1：5,000）

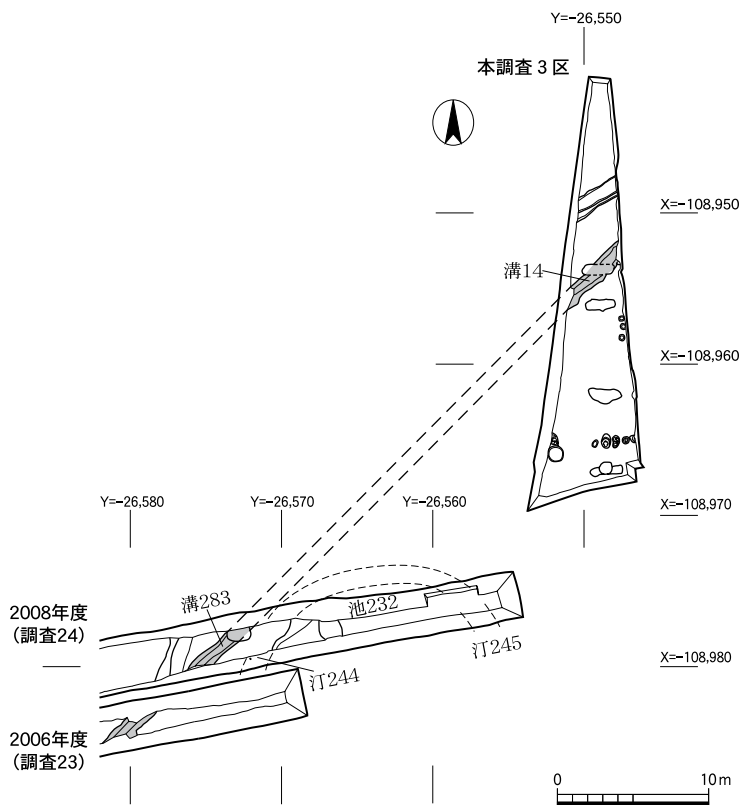


図 27 遺構分布図 (1 : 500)

境内内外区別実測図」と現況の地図を重ね合わせた場合 (図 26)、この調査区は広隆寺の寺域内となり、これらの門は寺域の東限である城北街道から境内地内への入口となる。この調査地の西隣接地は未調査地であるため、建物などに関する遺構は検出されていないが、調査 5 では平安時代後期から鎌倉時代の東西棟・南北棟の建物跡が検出されており、これらの建物を含む屋敷に関連するものか、もしくは、広隆寺の子院の存在が想定される。出土遺物からは時期の判断は困難であるが、布掘り基礎による柱穴が中世に見られる特徴であることから、その時期のものと思われる。門跡は平安時代中期の遺物を含む溝を埋めて造られていることからそれ以降のものである。

3区で検出した北東から南西方向の2条の溝は、ほぼ平行に並び、ともに溝の底面は平坦で、断面形は逆台形である。しかし、溝 14 が深さ約 1.7 m となるのに対して、溝 10 は深さ約 0.7 m と浅い。また、溝の出土遺物からみて、溝 14 が平安時代中期以前には存在していたと思われ、門 1 の建造を含め、中世に整地されるまでには埋められている。溝 10 からは平安時代に遡る遺物の出土は見られず、明らかな時期差がある。図 27 では、2006 年調査 (調査 23) と 2008 年調査 (調査 24) で検出した遺構を含めて示した。調査 24 で検出した溝 283 は、本調査の溝 14 とほぼ同様の方位の溝になると思われる。また、溝 14 の底面の標高が約 43.7 m、溝 283 は約 43.5 m であった。距離があるため、同一の溝であるとは断言できないが、鎌倉時代の池の下層から検出した溝であるとしていることから、同様の溝の可能性もある。

32) ではこの溝の続きは検出されていないが、これは溝が浅くなるため後世に削平されたためと考えられる。さらに南東へ延長されるが調査区外となるため、どのように展開するかは今後の調査に期待したい。調査 32 では調査区北東部で古墳の周溝と思われる溝を検出しており、今回検出した溝が古墳の周溝であれば、常盤東ノ町古墳群の分布が南へと展開していたことになる。

3区では棟門跡を検出した。門 1 から門 2 の中心礎石は一直線上に並ぶ。明治に測量された「山城国葛野郡太秦村 広隆寺



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき・ときわひがしのちょうこふんぐん							
書名	常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2011-8							
編著者名	近藤章子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	きょうとしうきやうく 京都市右京区	26100	908	35度 01分 03秒	135度 42分 33秒	2011年11月 28日～2012 年1月26日	約280m <sup>2</sup>	立体交差 事業
ときわひがしのちょうこふんぐん 常盤東ノ町古墳群	うずまさひがしほちおちやう 太秦東蜂岡町  ほか ちない 他 地内		874					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
常盤仲之町遺跡	集落跡 ・墓跡	古墳時代 ～飛鳥時代	溝、土坑、小穴、 落込	土師器、須恵器、瓦、 金属製品	古墳時代以降の南 北方向の溝を検出。 広隆寺の子院に関 連すると思われる 門跡を検出。 平安時代中期の北 東から南西方向の 溝を検出。			
常盤東ノ町古墳群	古墳	平安時代	溝	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、黒色 土器、輸入陶磁器、瓦 器、瓦、石製品				
		鎌倉時代 ～室町時代	柱穴、溝、土坑、 土壇墓、集石遺構	土師器、須恵器、施釉 陶器、焼締陶器、輸入 陶磁器、瓦器、瓦、石 製品、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-8  
常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

発行日 2012年3月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 Tel 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 Tel 075-256-0961